ベニバナエキスにメラニンため込み予防効果を発見

ポーラ化成工業

細胞のメラニンのため込みを、ベニバナエキス（キク科ベニバナの花から抽出）が防ぐことを見出した。表皮細胞にメラニンが過剰にため込まれるとシミにつながる可能性があることから、ベニバナエキスはシミへの改善効果が期待されるという。

ポーラ化成工業は、表皮細胞には、メラニン産生細胞で作られたメラニンを取り込み自らの細胞内にため込む性質があり、これがシミの原因となる可能性がある。このメラニンのため込みに関わる因子として、タンパク質の一種「PAR2」（Protease―Activated Receptor―2）が報告されており、メラニン産生細胞で作られたメラニンを表皮細胞へ送り届け『ため込む』性質を持つ。シミのない肌では表皮細胞へのメラニンのため込みはわずかだが、シミの部位ではPAR2の量が増え、過剰なメラニンがため込まれるため、シミとして見えることが知られている。

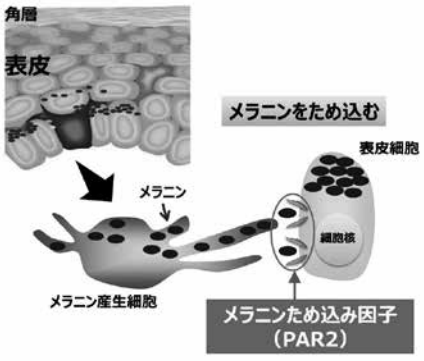
そこで同社は、シミを改善するにはメラニン産生を低下させるだけでなく、メラニンが過剰にため込まれることを防ぐことも重要になると考えた。

表皮細胞内のPAR2量を減少させる素材を探索した結果、ベニバナエキスにその作用があることが明らかとなった。

さらにメラニンの代わりに蛍光ビーズを表皮細胞に取り込ませる実験において、PAR2を意図的に増やした条件でも、ベニバナエキスを添加することにより、メラニンを模した蛍光ビーズがため込まれなくなることが確認された。

以上のことから、ベニバナエキスを配合した化粧料を使用することでメラニンのため込みを防ぐことができ、シミ改善への効果が期待されることが示唆された。

図：表皮細胞によるメラニンのため込み



ビューティーエクスペリエンス

ハチミツに毛髪の紫外線ダメージ抑制する効果を発見

ビューティーエクスペリエンスさいたまR&Dセンターは、東京工科大学大学院の前田憲寿教授との研究プロジェクトで「ハチミツの抗酸化作用」について評価を行い、毛髪の紫外線ダメージを抑制する効果を確認した。同研究は、今年3月末に開催される日本薬学会第136年回（横浜）で発表する。

同社は、ダメージ毛の原因となる活性酸素を抑える抗酸化物質としてハチミツに注目し研究を進めた結果、ハチミツがPPPHラジカル由来の吸光度を減少させ、DPPHラジカルを消去することがわかり、ハチミツには活性酸素やフリーラジカルを消去する抗酸化作用を有することが示唆された。評価した全てのハチミツ（ニュージランド産マヌカ蜂蜜、同クローバー蜂蜜、スペイン産ローズマリー蜂蜜など8種）で同様の結果を確認しているという。

また、毛髪は紫外線を受けると脂質の一部が過酸化脂質に変化しダメージを引き起こすが、ハチミツ配合の水溶液に浸漬させた毛髪は過酸化脂質の検出が有意に減少したといい、紫外線の毛髪ダメージを抑制する成分として期待できるという。

同社では、今回の知見を今後発売する新製品に応用していく方針だ。

私のH&B日記

ダイバーシティ

ここのところ「若い力」が事態を好転させたり、ヒット商品を生み出すような話題に出くわす機会が多い。

例えば、そごう横浜店は昨年1～12月の化粧品売場全体の売上高と客数が、いずれも前年から1割以上増えた。インバウンドの影響はほとんど含まれておらず、特に20代前半が4割ほど増えるなど若い世代の取り込みが顕著だという。

その一因にあるのが、組織の若返りだ。

一昨年に化粧品の係長に32歳の男性を抜擢し、周りの陣容も同世代で固めた。彼を中心に、これまで実施したことのない新たな販促策を積極的に展開して成果につなげている。

メーカーでは、オルビスが若手の活躍を売りにする企業の1つだ。近年は、新卒入社から数年目の社員がヒット商品を数多く打ち出している。

例えば、ある男性社員はメークアップアーティストを装い、百貨店の化粧品売場で実際にカウンセリングを受けながら企画の精度を研ぎ澄ませた。そうかと思えば、女性社員も負けじと処方開発の終盤は3日間にわたって研究所に通いつめる大胆な行動で周囲を驚かせたという。

一方、社内に新しいエッセンスを注入するという意味では、「国際化」を進めたり、「兼業制度」を導入するロート製薬の方針も目新しく映る。

アジアを中心に海外事業を順調に伸ばしている中、今後は「内なる国際化」が必要だとし、研究員の外国人比率を現状の5%から2020年に20%にまで高めるという。中国などアジアを中心に、主に若い研究員を積極的に採用する計画だ。

さらに「内なるダイバーシティ」も標榜し、新たに社員の兼業制度も導入する。異なる経験を、自社のイノベーションに活かしたい考えだ。

「ゆとり」や「さとり」など、どちらかというと否定的なニュアンスで世代を一括りにするような風潮には、強い違和感を覚える。「あの頃はこうだった」という従来の慣習や価値観を捨て、個性を尊重し、磨き上げる企業力が求められているといえそうだ。(近)

BASF

アルガン果肉由来「アルガセンシャル」発売

BASFでは、モロッコでアルガンオイルの持続可能な生産を支える「アルガンプログラム」が昨年、開始から10周年を迎えた。

このプログラムは、オイルとその副産物を使用した3つの化粧品原料を商品化することで副産物の価値を見出すと同時に、オイル生産協同組合の収入を多様化して地元住民によるアルガンの森の保全促進を目的にしている。

同社では2005年よりフェアトレード認証オーガニックアルガンオイル「リポフラクチルアルガン」、オイルの残りカス由来のタンパク質エキスで、皮膚の引き締め効果を持つ「アルガテンシル」、環境要因から肌を守るアンチエイジング成分でアルガンの葉エキスを使った「アルガニル」を化粧品原料として提供してきた。

2016年からは、アルガン果肉から抽出した新規有効成分「アルガセンシャル」の発売を開始した。皮膚のハリを改善し、唇と頬をボリュームアップさせて顔の均整をよくする。

臨床研究では、濃度2%で唇のボリュームを8%アップさせることが証明された。エコサート、コスモス、IECICの認証を受け、中国の基準にも準拠しているという。